

## 山岳トイレのあり方を考える －「屋久島への提言」を中心に－

山川 陽一（日本山岳会理事・世界自然遺産プロジェクトリーダー）

### 1. はじめに

世界自然遺産の島屋久島で、オーバーユースによる自然環境の悪化が目に見える。

屋久島は1993年、白神山地と共に日本で最初の世界自然遺産として登録された。その類稀な自然を守り後世に伝えることが最大目的のはずであった。「世界遺産」というブランドは両刃の剣である。屋久島では、世界自然遺産登録以降、一気に上昇した観光的価値に偏重した政策がとられ続け、その結果、守るべき自然の価値が損なわれるという本末転倒の結果を招いてしまっている。

屋久島は大隈半島南端佐多岬の沖合い60キロの洋上に浮かぶ周囲132キロメートル、陸地の90%が山地森林に覆われた山岳島である。宮之浦岳や永田岳に代表される高山やその周囲を囲む深い森、美しい溪谷は、古くから人々の心を魅了し、多くの岳人たちが屋久島通いをしてきた。その屋久島でおきている自然環境の悪化は、われわれ岳人として放置できない大問題であった。

日本山岳会自然保護委員会では、屋久島在住の一会員から発信された屋久島のオーバーユースの現状を伝える一通のレポートが発端になって、ことの重大さを再認識し、2009年12月に世界自然遺産プロジェクトを発足させ、問題解決に向けた取組みを開始した。あえて屋久島プロジェクトとせず、世界自然遺産プロジェクトとしたのは、この問題を日本の辺境で起きている小さな環境問題としてとらえるのではなく、世界自然遺産という広い観点からアプローチして、広く日本全国の人々や世界の人々と問題の共有化をはかりたいと考えたからである。プロジェクトのメンバー構成も、日本山岳会という組織の枠にこだわらず、屋久島、白神山地、知床それぞれの自然遺産地域の情報に精通している人たち、山岳環境問題に高い知見を持った大学の研究者、トイレ問題の専門家などを集め、的確な判断と検討ができる体制を整えた。数次にわたる現地のフィールド調査、関係機関やガイドその他島民からの情報収集、島民との意見交換会の実施、東京でのシンポジウムの開催など一年にわたる活動を通じて、正確な現状把握に努め、問題点の整理と対策の検討を行ってきた。その結果に基づいて、“あるべき屋久島”の姿を描いた「屋久島への提言」－危機遺産にさせないために－をまとめ、関係機関の人たち、島民、山岳団体や自然保護団体、報道機関などに呼びかけて、2010年11月2日屋久島において、11月4日東京において、発表会を実施した。

提言内容は、広く山岳環境全般にわたっており、トイレ問題はその一部に過ぎない。にもかかわらず、筆者が事務局の要請で本誌の原稿をお引き受けしたのは、山岳トイレ問題

は、単にトイレだけに焦点を合わせて考えても本質的解決にはならず、山岳環境全般の中で論じる視点こそが重要であると考えてきたからである。そういう意味で、屋久島は恰好なケーススタディである。

以下に提言の内容全体を概説し、その後、山岳トイレ問題について掘り下げた論及を試みたいと思う。

## 2. 「屋久島への提言」－危機遺産にさせないために－ (提言概説)

(本項は、日本山岳会機関紙「山」2010年11月号掲載の拙文に加筆をして転載した)

### ■ 屋久島の現状と問題点

前述したように、世界自然遺産登録後それが持つ観光的価値に偏重した政策がとられつづけたことが今日の事態を招いた根本的原因であるが、加えて、縄文杉効果や百名山ブームがそれに拍車をかけた。

具体的には、山岳トイレ問題、山小屋問題、歩道・自動車道問題、ガイド制度などに問題が山積しており、屋久島では関係者によりいままでも幾多の対策が取られてきたが、それらすべてが後追いの対症療法であったため、根本的問題を抱えたまま今日に至っている。現状では、危機遺産リスト入りも懸念される。

### ■ “あるべき屋久島の姿”は何か

こんな現状を打破し、屋久島の価値を取り戻すにはどうしたらいいのか。それには、屋久島の価値＝自然という原点に立ち返っていまの屋久島を見つめなおし、理念だけでなく実像としての“あるべき屋久島の姿”を明確にすることからはじめるべきである。

縄文杉がまだ脚光を浴びる前の屋久島、もちろん、世界自然遺産など関係なかったときの屋久島の山々を歩いてきた登山者にとって、いまの縄文杉コースの混雑と喧騒は、もはや山とは言えない代物である。「あるべき屋久島の姿は何か」と問われれば、願わくばその当時の状態に戻って欲しいというのが登山者の立場からの偽らざる気持ちである。片や、ここまで観光地化が進み、島民の多くが観光に依存した生活をしている現状を考えれば、一足跳びに縄文杉以前の状態に戻せと叫んでも非現実的である。

当面の目標として、まずは、「生態系の保全レベルとして世界遺産登録の年1993年前後の状態に戻すこと」、これがプロジェクトとしてたどり着いた結論であった。完全復活の処方箋は、今後、走りながら考えればいい。

### ■ 「屋久島環境管理基準表」の制定

屋久島では、世界自然遺産登録の年に、島民自らの手によって自然と人間の共生を謳った「屋久島憲章」を制定し内外に発信した。今読み返しても非の打ち所がない立派な理念であるが、それをないがしろにして今日の事態を招いてしまった最大の要因は、この理念を具現化する実像としての“あるべき屋久島”が描かれていなかったためである。

それでは“あるべき屋久島”とは具体的に何か、これを表現したものが「屋久島環境管

理基準表」である。島全体の山岳地帯を、観光・自然観察路、登山道（A～C）、原生保存地域、岳参り歩道などの区分に分け、それぞれの区分別に、歩道、トイレ、山小屋、入下山のアクセスなどのあるべき状態を表形式にまとめて明示したものである。また、この設定や変更をおこなう協議会を設定して、あるべき屋久島の姿が有名無実にならないよう歯止めをかけることが重要である。

### ■ 入島料の徴収

2008年に日本山岳会会員全員を対象に実施した「山の環境意識調査」（回答者1912名）の結果では、入山規制や入山料の徴収により山岳自然を守ることの必要性を支持する意見が圧倒的であった。

屋久島のケースでは、一歩進めて、継続的に環境整備していくためには安定的な財源が必要、という観点から、入島料徴収の提案をしている。勿論、観光目的の入島者全員からお金を徴収する以上、「世界自然遺産の島の自然環境を守る」という明確な目的があり、価値ある屋久島を実現していく強い決意と具体的計画を持ち、使途や収支決算が公開されることが大前提になる。

### ■ 入山規制の実施

環境保全の観点から突き詰めて考えていくと、入山者を無制限に放置したままの対策では根本解決にならない。一定数の入山者制限をした上で、その入山者に応じた利用環境を整備していくべきであると考ええる。

入山規制の方法としては、縄文杉コースの日帰り者数、小屋泊まりの登山者の小屋別宿泊定員、1グループあたりの人数（ガイドを含む）の3面について、それぞれ上限値を定める方法をとる。

### ■ トイレ問題は放置できない

かつて、山のトイレは、野生動物と同じで、空を眺めながら野外で済ませるのが当たり前のスタイルだった。登山者の数が山の保有する浄化能力以内に収まっている時代は、それで何の問題もなかった。大衆登山の時代になって、国民の多くが山に親しむようになった今日、山の事情は一変した。いまや、山岳環境上最大の問題がトイレ問題であるといっても過言でない。入山規制をすれば「トイレは不要」といえるほど少人数の規制ができるなら別だが、現実的にそれが望めない以上、設定した入山者数に対応したトイレ対策を施すことが、入山制限実施の条件であると考えべきである。

清掃・保守対策の確立、環境配慮型トイレの導入、携帯トイレの使用とその具体的運用方法についても合わせて提案している。

### ■ 山小屋のありかた

現在ある屋久島のすべての山小屋は、20-30年前に建設された状態のままで、以来今日まで登山者数だけが増加の一途をたどって今日に至っている。当然、ピーク時には泊れない客が出たり、登山客同士で場所取り合戦が始まる。トイレも各小屋にひとつしかなく管理人もいない無人小屋だから、そこに定員を遥かにオーバーした登山客がおしかければ、

何が起きるか想像に難くないだろう。本提言では、入山規制とリンクさせた定員制の実施と主要な山小屋の有人化（東北や北海道の一部避難小屋で実施している寝具食事提供のないスタイルの有人化）の提案をしている。

#### ■ 歩道および自動車道のありかた

現在、縄文杉コースの歩道は、登山客の増加に対処してすべて木道化され、大掛かりな観覧デッキや休憩用のデッキが設けられて、著しく景観を損なっている。その木道も、歩行者のすれ違いが困難な狭い幅で、混雑時の渋滞の原因になると同時に、はみ出し歩行による植生破壊や急坂での転落の危険も内包する。恒久策として順次木道を廃止し、屋久島が伝統的に培ってきた石積みの道へ置き換えること、迂回路新設によりワンウエー化をはかることなどを提案している。

また、歩道（登山道）につながるアクセス道路のあり方は山岳環境上根源をなす問題である。日本のどこの山でも、自動車道の舗装化と伸延による入山アクセスの改善が、入込み客の増加に直結してきた。屋久島では、今後、山岳歩道に直結する自動車道の舗装化と伸延を一切禁止することを提案したい。これにより現在まで守られてきた自然がこれからも保存されることになる。

#### ■ ガイド制度について

屋久島のガイドの悪評が絶えない。ガイドは屋久島の顔。ガイド制度を根本的に見直し、悪評ガイドの商売が成り立たなくなるようなガイド制度、利用者が安心して頼めるガイド制度に再構築する必要がある。具体的には、組織の一本化（現在の観光協会ガイドとエコツーリズム推進協議会ガイドの並立を統一する）、ガイド用件の整備とそれに基づく認定ガイド制度の確立などが必要と考える。

もっと詳しい情報が知りたい方は、下記ホームページに提言書の全文（26 ページ）を掲載してあるので、アクセスしてください。

**世界自然遺産を考えよう！**

<http://jacsekaiisanprj.sakura.ne.jp/>

### 3. 山岳トイレのあり方について

#### ■ 屋久島山岳部のトイレ事情

鹿児島港から屋久島行き的高速船に乗りこむと、船内放送で、屋久島では、世界遺産の山岳環境を守るため入山者ひとり500円の屋久島山岳部保全募金活動を行なっていることや、携帯トイレの実施がはじまっていることなどが知らされ、協力を呼びかけられる。

屋久島山岳部保全募金は、屋久島山岳部利用対策協議会が山岳環境整備を目的で行なっている募金で、各登山口などに募金箱が設置されている。主たる用途は、屋久島の各山小屋の固定トイレ（汲み取り式）のし尿を人力で搬出するための人件費である。以前は、山

小屋近辺に埋設処理されていたが、環境上の理由で数年前から人力搬出が始まった。当初は、国のふるさと再生特別事業資金を利用してきたが、3年間の助成期限が切れる2009年度を契機に登山者に対する募金が始まった。

また、トイレの不足を補うため携帯トイレの導入が環境省主導で検討され、2009年に縄文杉と宮之浦岳登山者を対象に導入試験が行なわれ、2010年から本格実施に踏み切った。縄文杉コースについては、固定トイレの補助的手段として、また、宮之浦登山コースは携帯トイレを積極的に使用するエリアとして位置づけられ、仮設ブースや回収ボックスの設置など体制整備を行ないつつ利用の促進が行なわれている。携帯トイレは島内33箇所ですべて1パック（1回用）500円で販売されている。

固定トイレについては、縄文杉コースの荒川登山口、大株歩道入口でそれぞれ一定容量の固定トイレの整備が行なわれてきており、荒川登山口と大株歩道入口の中間点にあたる小杉谷荘跡地には、バイオトイレ2基が阪急交通社と小林製薬の寄贈により設置されている。また、宮之浦岳登山の入口のひとつである淀川登山口の既設トイレは九州JRホテルの支援で建替えが計画されている。これらの場所は、自動車道や森林軌道が通り電気が使える等の条件が揃っていることから、今日まで、ある程度登山者増に対応すべくトイレ容量増加の努力が続けられてきた。一方、山中6か所の山小屋に付属するトイレ（各小屋に汲み取り式トイレ1基設置）は、すべて、20-30年前小屋を建設した当時のままで、それ以降登山者だけが増加の一途をたどって今日に至っている。ここでは、トイレ絶対数不足の問題とあわせ、し尿処理（埋設／人力搬出）と清掃等の管理が大きな問題になっている。昨年、ようやく、新高塚小屋で環境配慮型トイレ（TSS方式による自己完結型トイレ1基）の試験設置が行なわれることになった。

以上、屋久島山岳部のトイレの状況を概観したが、現状についての詳しい情報は、下記の報告書があるので参照願いたい。

- ・ 第11回山のトイレを考えるフォーラム資料集（2010年3月6日発行）  
「屋久島の山岳トイレの現状 2010」小原比呂志（屋久島野外活動総合センター）
- ・ 2010.12.3 福岡開催・山岳トイレ技術セミナー資料  
「屋久島での山岳トイレ取組み事例」岡野隆宏（鹿児島大学教育センター特認准教授）

## ■ 問題は何か

以上から、いままで屋久島でトイレ問題が無為に放置されてきたわけではなく、行政側としても一定の努力が続けられてきたことがわかる。それにもかかわらず、現在、問題が噴出しているのはなぜか。

ことばは悪いが、後追いの対策に終始してきたことに尽きる。利用者が増える、批判が出る、対策をとる、更に利用者が増える、批判が出る、また対策をとる、の繰り返しであった。とられる対策も、それが最適かどうか、十分かどうか、明確なコンセプトや将来のスコープを持って対応してきたとは言いがたい。

以下、屋久島における具体的問題点を列挙してみよう。

- ・ **利用客のピーク時の対応**

2009年の縄文杉日帰り登山者のデータを見ると、5月の連休時には、一日1000人に近い客が縄文杉を往復した（5月3日913人、5月4日953人）。シルバーウィークの9月21日には1306人が入山している。（資料3参照） そんな状態の中、縄文杉に隣接する高塚小屋のトイレや縄文杉に至る各所のトイレで、トイレ待ちの長行列、トイレ外での用足しが起きるのは容易に想像いただけると思う。ピーク時の山小屋でも、同じ問題が起きる。ねぐらを確保するため醜い場所取り合戦がはじまり、当然のことながら、トイレを待ちきれない客は、小屋の周囲の樹林帯で用を足す。

- ・ **し尿処理と清掃**

数年前からし尿の担ぎおろしが始まっているが、資金不足などにより全量の処理ができずに依然として一部地下埋設が続いている。人力による担ぎ下ろし自体も、将来形として永久に続ける姿かどうか、疑問符がつく。

小屋には管理人がいないから、トイレの清掃などの管理体制にも大きな問題がある。

- ・ **携帯トイレの使われ方**

行政当局はトイレ不足の解消策として携帯トイレの使用推進をすすめているが、当局が想定している携行者数・利用者数の予定（予測）値が異常に低いのは理解できない。

携帯トイレ利用を推進する以上、100%携行100%利用を前提に考えて、無理なくそれが受け入れられる方策を確立すべきであろう。

## ■ 解決のアプローチ

2010年11月30日、東京代々木の日本青年館で「山はみんなの宝！全国大会」と銘打った催しが開催された。

元をただせば、6月、政府の仕分け作業で「山小屋トイレ整備補助事業」（国からの山岳トイレ建設補助金）が廃止の判定を受けたことに端を発する。7月22日、急遽、東京虎ノ門で山岳関係者などの呼びかけで集会が開かれ、トイレ事業継続要請のアップールが行なわれたのだが、その第2弾ともいべき11月30日の集会は、単にトイレ問題に限定してその必要性を訴えるのではなく、日本の国土の70%を占める山の保護と利用という国民的観点から山岳環境のあり方全般を検討する中で、そのひとつに山岳トイレ問題もあるという位置づけで、諸問題が論じられた。まさに、屋久島提言の全国版であった。（本会のトイレ問題を論ずるセッションで、パネラーのひとりとして、日高十七郎屋久島町長も参加された。）

トイレ問題を、単にトイレ問題としてとらえるのではなく、広く山岳環境全体としてとらえ、その中のトイレ問題と位置づけることにより、根本的な解決の道筋が見えてくる。

#### ・ まずは入山規制が先決

自然保護は相対的なものである。かつては許されたことが今は許されない。同じ屋久島でも、観光化されている縄文杉コースと花山歩道や尾の間歩道などベテラン登山者しか踏み込まないような場所ではまったく考え方が違っていい。

「お花畑で昼寝をすれば、チョウチョが飛んできてキスをする。ランランランラン♪♪」。昔よく唄った山の歌の一節である。僕たちが一生懸命山登りに精進していた頃の山岳は、今と比べれば格段に入山者が少なかった。お花畑に踏み込んで、花を摘んでも、青空を眺めながら用足ししても、とがめるものは誰もいなかった。山にトイレなどなく、まして、携帯トイレなどという逸品は存在しなかったのだから、当然といえば当然で、登山者の総数自体が取るに足りなかった時代だから、自然へのインパクトは小さなもので目くじら立てるほどのことではなかったわけだ。山の大衆化が進み、登山者がうなぎのぼりに増加するにしたがって、いまや、それらの行為は罪悪に変わった。

屋久島提言はこんな考えを原点として構成されている。

無制限に増えていく登山者を野放しにしたまま、それによって引き起こされる問題の対策を後追いで行なっていくだけでは問題解決にならない。屋久島憲章で謳われた自然との共生という観点から考えれば、まずは、増えすぎた入山者の絶対数を抑制することが先決である。

提言では、縄文杉コースの入山者数と山中の各山小屋の宿泊者数、および、登山者1グループあたりの人数に一定の枠をはめることで、利用者のピークカットをすることを進言した。その上で、それら上限数に見合ったトイレの容量を確保することを求めている。それをしっかり行なっていくことが、行政の責務である。

#### ・ 携帯トイレについての考え方

携帯トイレの利用を促進するなら、必ず使ってもらえる条件を整備すべきであろう。屋久島の場合、島の各所で1パック（一回用）500円で販売しているが、値段が高すぎる（販売店や観光協会のマージンが入って高いものになっている）、および、所持を強制されていないことが主因で、利用者も限定されてしまっている。まして、縄文杉コースのように、携帯トイレが補助的位置づけになってしまうと、「ほとんど使わないようなものを500円払って購入するのはバカバカしい」ということになってしまう。

提言では、携帯トイレの携行の義務付けと併せて、使わなかったときは現品返却と引き換えでお金が返るデポジット制を導入すること、入山ゲートでの携行チェックとその場での販売、ガイドに対する携行義務などにより、無理なく100%使ってもら

える条件を創出することを提案している。もちろん、仮設ブース、回収ボックス、搬出方法、焼却炉などをシステムとして整備することは当然である。

もし屋久島でデポジット制が成功すれば、全国に先がけた携帯トイレの新しい利用モデルになるだろう。

#### ・ 環境配慮型トイレの導入

未来永劫人力による担ぎ下ろしを続けるのか。利用者に不快な思いを強い続けるのか。誰しも、人気山域のトイレのあり方として、環境配慮型トイレへの移行を考えることに異論はないと思う。問題は、建設運用コストがどれくらいかかるか、求められる機能条件を満たす適切な方式のトイレは何かの2点になるだろう。

日本の場合、10年ほど前から国の補助金が出るようになり、それに地方自治体からの補助金加わって、主要な山岳で環境配慮型のトイレの導入が一気に進んだ。

いろいろな方式のトイレの開発競争にも拍車がかかり、高度な機能を備えたトイレが出現したが、国や地方自治体からの補助金を利用しないかぎり導入が難しいほど高価なこと（高価でないと補助金が出ないのも問題）、立地条件（スペース、水、電気、気象、アクセス等）や利用者数、メンテナンス性などに起因するトラブルが多いことが問題である。その縮図を、この冊子にも度々登場する北海道の幌尻山荘のトイレ問題に見ることができる。

屋久島での環境配慮型トイレの導入は緒についたばかりであるが、導入には慎重な対応が望まれる。

私見を述べれば、山岳トイレは簡便で故障がなく導入コストが安いものでなければならぬ、そのためには補助金のありかたを見直し、機能だけを競うのではなく、ローコストで保守性に優れ品質保証がされた商品開発を誘発するような仕組みに変えていく必要があると考えている。

#### ・ 資金の確保

建設コストだけでなく維持コストを含めて考えると、一定の継続的安定的財源を確保する算段は欠かせない。屋久島の場合、利用者からの募金と携帯トイレの売上げにそれを求めようとしているが、果たしてこれが適切か、これで十分であるかと問われれば、否と言わざるを得ない。

提言では、トイレを含めた屋久島の環境保全全般に充当するものとして入島料の徴収を建言している。

## 4. さいごにひとこと

屋久島町では、いま、屋久島エコツーリズム推進協議会により「屋久島エコツーリズム推進全体構想案」が作成公表され、2012年度実施をめざして審議中である。果たして、この内容が、屋久島が持つ自然の価値に軸足を置いたものになるのか、依然として観光優



先に軸足を置いたままになるのかで、今後の屋久島がありふれた観光の島になってしまうのか、世界自然遺産の島としてますます輝きを放つようになるのかが決まる。屋久島は今大きな岐路に立っている。

われわれ世界自然遺産プロジェクトチームが発信してきた諸問題について、もっと真摯に、真剣に受け止めて、この全体構想に反映されていくことを願ってやまない。

以上

付1. 屋久島年度別入込客数（種子屋久観光連絡協議会調べ）

年	船	航空機	計(人)	年	船	航空機	計(人)
1990	140,763	46,706	187,469	2000	191,570	71,507	263,077
1991	172,404	49,361	221,765	2001	209,697	76,580	286,277
1992	186,721	54,902	241,623	2002	204,531	85,004	289,535
1993	153,028	56,191	209,219	2003	228,436	86,330	314,766
1994	175,007	58,482	233,489	2004	203,271	90,561	293,832
1995	203,231	53,414	256,645	2005	231,332	85,552	316,884
1996	195,880	56,958	252,838	2006	251,239	81,985	333,224
1997	202,721	61,013	263,734	2007	332,028	74,359	406,387
1998	211,288	68,447	279,735	2008	310,531	75,456	385,987
1999	193,927	66,234	260,161	2009	251,931	75,930	327,881

付2. 山間部入山者数（屋久島エコツアーリズム推進全体構想から転載）

	2000 年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
白谷雲 水峡	39,383	53,676	62,868	75,880	75,725	85,676	86,457	103,973	127,213	108,994
ヤクスギ ラント	75,624	85,224	100,361	122,372	106,443	95,566	99,692	102,758	108,173	85,381
縄文杉 コース	29,717	39,625	34,056	40,834	41,866	53,619	63,237	67,074	92,609	91,015
宮之浦 岳	15,225	17,255	16,522	17,916	17,203	14,843	14,638	14,839	16,490	14,854

### 付3. 2009年縄文杉コース入山者明細

月	入山者数		入山者数別日数									
	月間 (人)	一日 平均 (人)	~99 人	100 ~ 199	200 ~ 299	300 ~ 399	400 ~ 499	500 ~ 599	600 ~ 699	700 ~ 799	900 ~ 999	1300 ~ 1399
1月	578	19	31									
2月	1918	69	24	3	1							
3月	9235	298		4	15	9	1	1	1			
4月	6820	227	2	12	10	5				1		
5月	10492	338	1	1	15	9	2	1			2	
6月	5360	179		20	10							
7月	11586	374	1	2	4	11	10	2	1			
8月	14766	476			1	5	15	5	5			
9月	13779	459			4	10	7	5	2	1		1
10月	8798	284	2	3	14	8	3			1		
11月	5921	197	7	12	8		1	2				
12月	1762	57	29	2								
計	91015	249	97	59	82	57	39	16	9	3	2	1

元データ: 環境省屋久島自然保護官事務所提供(大株歩道カウンター)

### プロジェクトの構成メンバー

山川陽一	プロジェクトリーダー	日本山岳会理事・自然保護委員会委員
富澤克禮	プロジェクトメンバー	日本山岳会自然保護委員長
下野武志	"	日本山岳会自然保護委員会委員
川口章子	"	日本山岳会自然保護委員会委員
太田五雄	"	日本山岳会福岡支部(屋久島在住)
山本博	"	日本山岳会福岡支部・支部自然保護委員
加藤峰夫	アドバイザー	横浜国立大学国際社会科学研究科教授
愛甲哲也	"	北海道大学大学院農学研究員准教授・日本山岳会北海道支部
柴崎茂光	"	国立歴史民族博物館研究部
上幸雄	"	NPO 山の ECHO 代表理事・日本山岳会会員
村田孝嗣	"	日本山岳会青森支部・支部自然保護委員
近藤緑	広報	日本山岳会常任評議員・自然保護委員会委員